

『社会政策論の方向転換』への旅(上)

池田 信

- | | |
|----------------------|----------------------|
| はじめに | (4) 労働組合 ストライキ論 |
| 1 実践的直観 場所即過程の弁証法 | (5) 社会政策の基礎理論 |
| 2 重工業における機械工組合の確立 | (6) 労働組合法論 |
| (1) 研究に際しての心構え | (7) 社会政策思想家と社会行政との融合 |
| (2) 労働組合期成会鉄工組合 | 4 メタ理論の探求 |
| (3) 友愛会 | (1) イデオロギー論と構造作用論 |
| (4) 戦間期以降の労働組合 労働関係 | (2) 戦略 関係主義 |
| (以上, 本号) | (3) 政策論と社会論 |
| 3 日本の社会政策思想史(以下, 次号) | 5 社会政策論の転換 |
| (1) 「学会」史批判 | 本質 必然主義から戦略 関係主義 |
| (2) 私の研究方法 | へ |
| (3) 工場法論 | |

はじめに

定年退職にさいして求められた「チャペル講話」のなかで、私はみずからの歩みに簡単に触れた。その一部分を引くことから始めたい。

「大学時代は、鉄鋼の合理化投資など経済成長の地均しが行われ、同時に労働攻勢から経営

権奪回へと労使関係の再編成がなされたときであり、長期にわたる労使紛争が続いた。独立に伴う統治体制の再編成が政治運動の高揚を招いていた。大学では、ケインズの再編か、マルクスの改革か、盛んに論議された。それらに刺激されて学生運動に参加し、大学での勉強はおろそかになった。

【略歴】

- 1934年 横須賀市生まれ。
- 1956年 関西学院大学経済学部卒。1年間の会社勤務を経て同大学大学院経済学研究科修士課程、博士課程に進学。同学部助手を務めた後、
- 1966年 埼玉大学経済学部助手。続いて埼玉大学経済短期大学助教授、教授。
- 1970年 経済学博士（関西学院大学）。同大学院経済学研究科指導教授。
- 1988年 関西学院大学経済学部教授。
- 2002年 同大学定年退職。

大学卒業後、中小企業に就職したが、面白くなくて1年でやめた。しかし企業がどのように自己を再生産するか、その構造と動態を内から見ることができ、このことが後にオートポイエーシス論を理解する助けとなった。このシステムの動態とそこに組み入れられた労働者の苦悩、それについてもっと勉強したいと考え、大学院に入学し、その後幸いにして研究職に就くことができた。

日本における労働組合運動の形成を、次いで日本における社会政策思想の形成を研究テーマとした。高度経済成長が現実のものとなる中で、ヨーロッパ・モデルを尺度として日本の後進性 前近代性を強調するこれまでの研究パラダイムの破綻が明白となった。ポスト工業化の傾向が顕著になり始めると、工業化を基盤として設計された研究方法も行き詰まっていく。私はこれらの転換期に立って、従来の考え方に拘束されることなく、事実を事実そのものとして理論的に再構成しようと力を注いだ。『日本機械工組成立史論』、『日本社会政策思想史論』、『日本的協調主義の成立』は、この試みの成果である。

関西学院大学に戻ってからは、上の研究を默示的に導いた研究方法を明示的なものにしようと考えた。場所即過程 実践的直観の弁証法がすでにもっていたメタ理論であるが、これを今の先進的な学者の理論に学びつつ現代的な意義をもつものにしようとして試みた。E.P.トムソン、アルチュセル、ハースト、ギデンズ、ラクラウ&ムフ、ジェソップ、トーフインらの著書をまさに自己流に読み込んでいった。まったくの徒労に終わるかもしれない、苦しい孤独な営みであった。

しかしいつしか道が開け、峰からの新しい眺望に心を満たされた。退職直前に『社会政策論の転換 本質 必然主義から戦略 関係主義へ

』の著書をまとめることができたのは、たいへん幸福であったと思う。)(関西学院大学経済学部『エコノフォーラム』第8号, 2002年3月)

本稿では、この小さな歩みをいまずこし詳しく述べることにする。

私の各著作に番号を付し、以後、言及の際はその番号のみを記すことにする。

『日本機械工組成立史論』1970年, 日本評論社。

『日本社会政策思想史論』1978年, 東洋経済新報社。

『日本的協調主義の成立 社会政策思想史研究』1982年, 啓文社。

『労働史の諸断面』1990年, 啓文社。

『社会政策論の転換 本質 必然主義から戦略 関係主義へ』2001年, ミネルヴァ書房。

1 実践的直観 場所即過程の弁証法

大学を卒業して、あるメリヤス製造会社に就職した。わずか1年の経験であった。しかし、感ずるところ、学ぶところは多かった。

営業部に属したが、はじめに与えられた課題は企業活動全体を学ぶことであった。中規模の会社であったので全体の営みを学ぶには適していた。事務所と工場とは隣接していたので、工場に出入りしてそこで働く人とふれあう機会も多かった。全織同盟加盟の企業別組合があり、私も1組合員となった。良き営業成績という企業目的にそってのinput withinput outputの流れ、効率化を図るための分業、分化されている諸部門をつなぐ情報手段、労使関係を安定させるための方策などなど、なるほどうまく組織されているな、と感心した。経営学的観点からいえば、また労働問題研究の観点から見れば問題点の多い中小企業の経営管理、労務管理とい

うことになるであろうが、企業についての知識の著しく乏しかった私にはこちらのほうが勉強になった。システムの自己組織性についての関心が生まれ育つことになる。

しかし、営業という仕事は私には適していなかった。企業の営利活動に自分の精神 身体 感性を従属させることには耐え難いものがあったし、長きにわたってこの仕事に携わることに生き甲斐を見いだせるとは思えなかった。「ああ労働者、労働者か」という工場の人たちのためにも他人事とは思えなかった。企業とその中で働く人々の苦悩、この点についてもっとよく考えてみたいと思った。

納品にいく車の荷台に乗ったことがある。そのころの阪神国道は穴だらけ、車はスキップしながら走る。荷台ではメリヤス商品と労働力商品とが同格で踊っていた。＜我もまた商品なり＞と、そのときしみじみと思った。ここで働いていたときのことで真っ先に想い出すのは、布地を晒すカルキの臭いと猛暑の工場にたちこめる腋の臭いである。いずれも強烈であった。工場労働は感性的にもとらえなければならないと思う。いまにして思えば、このときの企業体験は社会政策 労働問題を研究するための貴重なインターンシップであった。

大学院に入ってはじめて考えたのは、労働を支配し管理するメカニズムとその中で働く労働者との関係をどのようにとらえるかであった。そのころ若きマルクスが目目されるようになり、彼の『経済学・哲学手稿』がよく読まれていた。資本主義における労働の疎外、労働者の自己疎外、類的存在の喪失、労働者の苦悩、といった概念がたいへん魅力的であった。これらの概念を自分なりに組み入れて労働問題研究に活かしたいと思った。この問題意識を持ってマルクス『資本論』を読み返し始めた。

野間宏の『暗い絵』には、太平洋戦争に突入

する時期に反戦運動に参加する学生と労働者の群像が、また彼らの苦悩が独特の筆致で描かれている。その労働者のモデルのうちの一人、羽山善治氏と懇意になる機会に恵まれ、彼から人民戦線運動の意義とか、『近代文学』同人たちの問題意識とかいろいろと親しく教わった。私の研究上の問題意識について話したところ、哲学者の梯明秀に会ってみてはと紹介状を書いてくれた。これをきっかけとして大学院のゼミに参加させてもらうこととなった。1年目は梯明秀『ヘーゲル哲学と資本論』とヘーゲル『大論理学』第2巻第1篇「自己自身における反省としての本質」が、2年目は同じく先生著の『経済哲学原理』がテキストであった。

最初はたいへん理解に苦しんだが、しだいにその輪郭が明確になってきた。学びえたことはきわめて多い。

第1は、私なりに理解した＜実践的直観と場所即過程の弁証法＞である。それは一貫して私の問題意識を刺激し、また研究を背後から導く理念となった。この点については研究の歩みを説明する中でおいおいと触れていくことにする。

第2は、ヘーゲルの反省の論理を学んだことである。反省というと、「迷惑をかけたことを反省します」というような意味にのみ理解されがちであるが、それはReflexion (reflection) の訳語であり、ヘーゲルは反省規定として、A 同一性、B 区別 (1 絶対的区別、2 差異性、3 対立)、C 矛盾、をあげる。これはたいへん重要な論理であり、実在的な関係をどのような水準の反省としてとらえるかを判断する基準を与える。機能的 関数的関係だけが関係の論理ではないのである。

さらにヘーゲルから学んだことは、対他有 (Sein für Anderes) から向自有 (Sein für sich) への移行の論理である。単に他有に対している

だけのものは疎遠な関係であり、別の他有へと移りゆく不安定な関係である。しかし他有との関係のなかで自己を確立するとき、たとえば能力がその発現物との関係においてたえず自己に帰り、自己を維持するとき、それは自分に向かって有るものとなる。この向自有の論理は意識、自己意識、イデオロギーなどを把握する上で有効なものとなった。

第3は、「商品人間」と「労働人間」との統一としての現実的賃労働者という概念である。労働力の担い手として資本主義的総再生産過程の内に組み込まれた賃金労働者がかかるものとしての定有(Dasein)から、一方において労働力を商品として販売する立場にもとづいて向自有することが、他方において生産過程で労働を発現する立場にもとづいて向自有することが可能である。ここから相矛盾する二重の自己意識が生まれ、現実的賃労働者の自己意識はこの二重の自己意識をどのように節合するかで決まってくるという考えである。

私は大学院学生のころに二つの論文を書いている。「マルクス理論における“原理”としての労働力の展開」(関西学院大学『経済学論究』15-3)と「労働運動論のための予備的考察 論争批判と同論体系化の方法」(同16-2)である。前者は、マルクスにおいて商品としての労働力という概念が確立する過程を、すなわち「人間商品」から「労働能力」をへて「労働力商品」へといたる過程を論理的に追究している。後者は、労働力商品販売者と労働力発現者との二重の自己意識の矛盾的統一という観点から労働運動の展開を見ていこうという意向を示している。いま読み返せば、拙さばかりが目につくけれども、私の研究の出発点という意味でその存在を示しておきたい。

2 重工業における機械工組合の確立

(1) 研究に際しての心構え

渡部徹 大前朔郎 阿部真琴の3教授を専門委員として『兵庫県労働運動史 戦前編』の編集が始まり、大学院に入りたての私はアルバイトとしておもに資料の収集 整理にあたった。その後大前教授との共著で『日本労働運動史論

大正10年の川崎・三菱神戸両造船所争議の研究』(1966年、日本評論社)を公けにした。この過程で日本の重工業における労働組合形成に強い興味を懐くようになった。この時期には日本の労働組合史 労使関係史についての研究が盛んに行われるようになり、ほぼ同世代の小松隆二 中西洋 二村一夫 兵藤釗 山本潔などの諸氏がきそってこの分野を精力的に開発し、すぐれた論文を着々と発表しているのに大いに刺激を受けた。私も頑張ってみようと思った。

その成果が である。この研究を進めるにあたって心がけたことは、組合運動を組織し推進する指導者 活動家たちはどのような目的をもち、どのような戦略 戦術を組んで実践に入り、どのような成果をもたらしたかを、彼らの思考と行動を追思惟すると同時に、研究者の立場からこれらの運動の特質をその存立諸条件との関わりにおいて解明し、またその効果の成否を検討することにあつた。意識して退けた方法は、自然発生的な運動にどのように目的意識性を与えたか、ないしは与えなかったかを尺度にして実際の運動の善悪を裁断するような方法であり、またヨーロッパの労働組合の発展過程を尺度として日本の組合の後進性や歪みを測定する方法であつた。日本の労働組合はそれ自体の生成 発展の過程をもつのであり、それを解明することこそが必要である。もちろん、その特質を知るために他国の運動と対比することは重要である。

(2) 労働組合期成会鉄工組合

アメリカ合衆国から帰国してただちに労働組合の組織に取り組んだ高野房太郎の構想と実践を追思惟してみると、労働組合期成会とその「長子」である鉄工組合の結成とその活動がたいへんよく見えてくる。いま一人の指導者である片山潜の思想と活動についても同じことがいえる。詳しくは をお読みいただきたい。なお、その後いっそう詳しく論じる必要を感じ、 の第5章のなかで再論している。

高野たちは労働組合を組織するための組織、労働組合期成会を結成する。発足したのは1897年7月5日、そして重工業で働く会員が増えたとして鉄工組合を結成したのが同年12月1日である。帰国したばかりの知識人ないしは職人である指導者たちには、重工業労働者の知己はまったくなかったはずである。それがわずか5か月にして約1200人の鉄工を組織できたのはなぜであろうか。この疑問は鉄工組合に先行した労働者組織を検討することで氷解した。同盟進行組、工業団体同盟会、職場互助組織などが活動家を育てていたのである。彼らがいたからこそすみやかな結成が可能となった。しかし、この自前の活動が成長して鉄工組合になったのではない。やはり知識人指導者からの働きかけがなければ実を結ばなかったのである。

のほぼ半年後に刊行された大原慧の論文では、鉄工組合の実体は「封建的身分意識に根強く支えられていた親方的熟練工や渡り職工・経験工らを中心に組織され、その上にAFL的な近代的労働組合組織が重層的に重なって創りあげられたものであった。」「その共済活動は、主従関係を基礎に形成された旧親方・職人的身分と地位とを『労働組合』という新しい組織を通じて守ろうという、封建的意識にもとづく自助的救済機関」であった、とされる（『講座日本史』6、1970年、東京大学出版会、285頁）。

鉄工組合がその上層では「AFL的な近代的労働組合組織」であるとは、まったくの夢想である。高野の戦略構想や組織の実体を無視した結果である。また発足当初のこの組合の組合員構成を見てみると、その過半数は東京砲兵工廠労働者であり、そのうち圧倒的多数は小銃製造所に属している。当時この製造所では村田銃の大量生産がなされ、そのための専用機械が配置され、工程は技術者によって厳重に管理されていた。ここは当時としては例外的に工程管理が進んでおり、親方職工が幅をきかず余地は狭かったのである。このような特質をもつ部門の労働者が鉄工組合において主導的地位を占めていたのである。

日本鉄道大宮工場の労働者によって鉄工組合第2支部が組織された。ここには技手を発起人、小頭 副小頭を会長 副会長とする職場互助組織があった。ところが組頭以下の労働者たちはそこに属しながらあえて鉄工組合に参加した。ここから対立が生まれ、結局この職場互助組織は解散した。この支部は組合創立当初からの支部である。

いずれも大原の描く像とは著しく異なっている。なんの論証もないままに想像だけで虚像を造りあげている。そしてこのような見方を許容する雰囲気は当時なおあったのである。

鉄工組合は職業別組合主義を指向して組織され、形態的には職業別組合であったといわれる。しかし、職業別組合主義といっても古典的なものと変容しつつあるものとを区別する必要がある。指導者たちが求めたのは後者の方であった。また実際にできた組合は形態から見れば、指導者たちの意図に反して、職種別の別を問わず重工業で働く労働者全体を対象とする大産業別組合であり、支部も実態において収斂していく方向は居住地別ではなく、企業別ないしは事業所別であった。そしてその支部は内部を分課してそ

の根を職場に下ろそうとしていた。職業別組合を指向しながら、出来上がったのは形態から見れば大産業別組合であった。この点の解明は、私の特に力点を置いたところである。

ところで日本で職業別組合が確立しなかった理由について、私は在来職種と移入された新型職種とのあいだに連続性が乏しいこと、重工業の成長が著しく労働力のほとんどは農家が都市雑業層から得られたこと、また技術は輸入元の先進国においても分化しつつあり、手工的・万能的熟練は安定した基盤を持ちえなかったことをあげた。二村一夫は、兵藤釗や池田はかつて日本で工業化以前に徒弟制度のようなギルドの規制があったかのように考えているが、このような規制は徳川時代においても弱体であったと批判している(「日本における職業集団の比較史的特質 戦後労働組合から時間を逆行し、近世の〈仲間〉について考える」大阪市立大学『経済学雑誌』102-2)。その批判は説得的であるが、私としては、鉄工組合を組織するさいの産業的環境としてはその指摘の通りであるが、工業化の急激な進展はいつそう職業別組合成立の条件を奪うものであったとすることによってより総合的な理解に達すると考えている。

鉄工組合の最後の重要な運動は、日本鉄道株式会社機械工の待遇改善運動であった。鉄工組合員たちが核となった最初の待遇改善運動であり、結局は失敗に終わったが、企業内の諸支部の特性を知る上でも、治安警察法が果たした役割を知る上でも重要な闘争であった。において触れているが、の第一章「確たる労働者的地位の探求 日本鉄道内の鉄工組合諸支部」で詳論している。

庄司吉之助「日鉄機関方・職工同盟罷業の意義」(福島大学『商学論集』1968年12月)において『福島民報』の連載記事「日鉄職工同盟罷工の真相」が利用されている。この連載記事は

運動の経過と特徴を詳しく追究している貴重な資料である。私はその全文を知りたくて福島県立図書館に同紙を見にいったが、保管されていて利用できるのは残念ながら初めの6回分だけであった。ところが偶然にも岩手県立図書館所蔵の『岩手毎日新聞』に残りの部分を発見することができた。この連載記事、『労働世界』の記事、日本鉄道株式会社『社報』などによってこの運動についてかなり深く知りうる幸せにめぐり会うことができた。なお、「日鉄職工同盟罷工の真相」は『新編埼玉県史』資料編23に全文を収録しておいた。

(3) 友愛会

友愛会と労働組合期成会 鉄工組合とは、差異性とともによくの共通したものがある。この点については をお読みいただきたい。

ここで特に強調したいのは、知識人である鈴木文治の生産主義的労資調和論がなぜ一部の労働者の意識に強く訴えることができたかである。当時の労働者の内には急速に進む工業化に積極的に適応できるように生産者としての自己形成をはかろうとする者が数多くおり、またそれを支援する開明的な経営者 県知事 学者などがいた。神戸における友愛会組織の結成が、公立 夜間の実業補習学校における川崎造船所 神戸製鋼所 三菱神戸造船所労働者の交流を基盤としており、他方で実業補習学校の校長などがそれを支援したことが、初期友愛会支部の特徴を端的に示しているといえよう。友愛会は生産者としての自己形成を進めることを通して労働者の社会的 企業内的地位を高めようと訴えたのである。

労働力商品としての規定性をもつ賃金労働者が二重の自己意識をもつことについては先に触れたが、私は、それを労働力商品販売者の意識と反資本主義的生産者意識と呼ぶこととした。後者を端的に表すのは、労働者による産業管理

(workers' control of industry) の思想であるが、初期の友愛会が育成したのは資本主義的生産関係を捨象した単なる生産者意識であり、労働力商品販売者の意識はなお微弱であった。ところで運動の展開とともに現実の問題に突き当たると単なる生産者意識は容易に反資本主義的生産者意識に転化する。後にはギルド社会主義的な要素をはらんだ賀川豊彦の主張に影響されたことも一つの契機となつて、1921年の神戸大争議では工場管理をやろうとするところまで進む。では活動家たちの意識の推移をこのようにとらえようとした。これにたいしては労働者の意識の現実的 具体的なありようとその特質を視野に入れていないとして、トマス・スミス、アンドリュウ・ゴードン両氏の批判を招くこととなつた。私もこのようにとらえ方が本質主義に陥っていることを今では反省している。実際には労働者の意識を刺激する要素はきわめて多様にあり、これらを彼らがどのように節合しているかは、現にある自己意識をもとに把握する他はない。今では、この意識の変遷において上記二つの意識は本質ではなく、他の諸要素に比して強くかつ持続的な効果をもつ有力な参照点としてとらえなければならないと考えている。

私は一貫して支部の組織と活動を重視してきた。それを発展させるものとして の第2章「自主的活動の栄光と挫折 友愛会室蘭支部」を書いた。これは労働者会員が知識人の助けを借りないでまったく自主的に結成した支部であり、また初期の友愛会の内でもっとも代表的かつ先進的な支部であった。この論文では、労働組合期成会鉄工組合の活動、日露戦後期の組合不在の中での大企業におけるストライキ、友愛会室蘭支部の結成、この三つの事象は形式的には連続性がないがその地下水脈のところでは連続していることをいくつかの根拠をあげて推論してみた。断続的にはあるが労働運動の形

成 展開を可能とする場所の、ギデンズの論理(参照)を借りれば構造の存在を示すことであった。この支部はみずからの力で支部会館を建立し、さらに待遇改善運動に踏み切つたが、不幸にして敗北した。ここで活躍した活動家たちは、その後東京鉄工組合を結成したのを始め全国各地で労働組合運動の発展に貢献した。ではさらに鈴木文治 賀川豊彦の友愛会改革運動とその結果について言及している。

に返ると、労働組合化への志向は、講和条約の中で労働憲章とILO設立が謳われたのを好機として1919年の大会で労働組合の総同盟になると宣言することによって示された。それは支部の活動の積み重ねの上での宣言でなく、一部例外を除いてこれまでの支部の組織 活動形態の変わらぬままになされた観念先行の改革であった。ここに日本の労働組合形成の特質が顕著に示されていることを指摘した。

この観念先行の労働組合化から現実の労働組合化にどのように移っていったかの解明が、続く課題となる。1921年における労働運動の高揚が労使関係と労働組合にどのような効果をもたらしたかについては、 をご覧いただきたい。

の刊行によって、故藤林敬三博士を記念する講演会の講師に選ばれる栄に浴した。福沢諭吉ゆかりの三田演説館で演壇に立ちえた感激は、その後の研究の大きな励みとなつた。

(4) 戦間期以降の労働組合 労働関係

戦間期の労働運動については、 の第5章「労働運動の衛生的確立 川口鑄物業労働運動(1)」と第6章「昭和恐慌下中小企業再編成と組合運動 川口鑄物業労働運動(2)」がある。川口鑄物業労働運動について考察したものである。埼玉県の川口鑄物工業地帯では4000人の労働者が280の工場で働き、その雇用と賃金は製品の需給にじかに反応して激しく変動するものであり、これまでに考察した神戸の重工

業とはまったく対照的な特性を示している。1920年代の中頃までには大都市 主要産業 大企業の労使関係は一応の均衡に達していた。そして労働組合組織化の試みは、一連の社会政策立法が公布 施行されたことをも契機として、周辺地域、周辺産業、中小企業へと拡大していった。川口鋳物業では20年代後半には対立をはらみながらも強力な労働組合陣営が築かれた。しかし、昭和恐慌に見舞われ、組合は防衛的な闘争に全力を注ぐことになるが、しだいに精力を奪われ、左派は弾圧を受け、労働組合全体が戦争という溶解炉の中に投げ入れられた。戦前の中小工業地帯における労働組合運動としては、もっとも存在感のある組合運動であったといえよう。

埼玉県労働運動史研究会の活動や埼玉県史(近代 現代の社会労働部門担当)の編纂に参加したことが、交わされた議論に刺激を受けたという点でも、数多くの資料に接することができたという点でもたいへん役に立った。多くの組合指導者 活動家からお話を聞くことができたが、とりわけ徒弟から出発した根っからの熟練工である倉崎大吉氏からは、私自身川口に住んでいて家が近かったということもあって親しく行き来してお話を聞くことができた。それは資料を解釈するうえにおいても、また資料ではよく分からない職業生活、家庭生活、地域の文化 宗教、博徒の存在などなどを知るうえにおいても大きな価値のあるものであった(その一部は「谷市良・倉崎大吉両氏に聞く」として『埼玉県労働運動史研究』第9号に所載)。

ちなみに川口とは無関係であるが、中田惣寿 小春夫妻のことにも触れておきたい。自宅にたびたびお邪魔して、日本製鋼室蘭工場時代の労働生活、地域の生活、東京鉄工組合での活動、川崎三菱両造船所大争議への応援などなどを教えていただいた(その一部は「川崎・三菱

争議と中田小春 中田惣寿氏に聞く」渡辺悦次・鈴木裕子編『たたかいに生きて 戦前婦人労働運動への証言』1980年、ドメス出版に所載)。中田氏、倉崎氏ともに故人になられたが、その誠実で暖かいお人柄を偲び、親しくお付き合いさせていただいた幸せを心から思うものである。

さらに戦間期の労働を扱ったものに「の付論「戦間期神戸の労働」がある。これはおもに『労働統計実地調査報告』の神戸市集計版を使ってこの地域の業種間の労働条件の格差や労働者の諸属性、さらにこれらの変動を見たものである。1927年分を集計した版においては、産業別 男女別 年齢別 就業年数別にクロスさせて集計した賃金表が載せられている。戦前の公式労働統計としてはこのような形式での作表は希有なことであり、これを使っているいろいろと推計を行ってみた。また学歴や有配偶年齢についても一定の傾向を読みとることができた。全体としていえることは重工業大企業本雇い労働者の地位は格段に改善され、他産業労働者との格差は拡大した。しかし、格差は維持 拡大されたとはいえ、後者の条件もかなり改善されていることが分かった。さらに家計調査と国勢調査を用いて銀行員 会社員、工場労働者、日雇労働者の家計を比較することによって、また女性の雇用において家事使用人がもっとも多くを占める点に着目することによって、工場労働者の家計の特質と動向を、また家族生活における階層間格差に占める、女中といわれた家事使用人の効果を大胆に推論してみた。おもに統計にもとづく推論は、私にとっては初めてのものである。

第二次大戦後の労働組合運動を取り上げたのが、の第7章「生産管理をめぐる激闘 東洋時計上尾工場争議」である。総体的に見て生産管理闘争が後退し始めた時期になされたこの

生産管理は、対抗勢力である総同盟側の労働者が実力解除に入り、占領軍CICのジープがそれを助けたこともあって、産別会議側の勢力は敗退した。これは産別会議の攻勢から総同盟が反撃に移る転機ともなった。またこの生産管理の合法性 違法性をめぐって裁判の内外で激しい論戦が交わされた。戦後の労働運動をめぐる情

勢の変化を象徴する争議であった。対立するさまざまなイデオロギーとそのパワーの、絶えず変動する凝集構造の中で決着がつけられていく。イデオロギーの果たす役割の巨大さを実感した。(つづく)

(いけだ・まこと)

●家族と社会の新たな関係にむけての行動のパスベクトイフ
家族の政治社会学——ヨーロッパの個人化と社会
 ジャック・ユライユ／丸山茂高村学人訳(神奈川大学評議ブックレット20) 一〇〇〇円
 変貌する家族を通して現代社会を多面的に問う、私的なもの
 の再政治化。ヨーロッパ家族政策の第一人者による書下ろし。

●民主化の功罪——「第三の道」か、ナシヨナリズムの成長か
 羽場久泥子著(神奈川大学評議ブックレット19) 八〇〇円
 統合の動きを精密に分析し、貧富の格差・民族主義・右翼勢
 力の成長・ロシアとの関係など21世紀の問題を探る。

●グローバル化状況における「現代国家」の位相に迫る
グローバル化と現代国家——国家・社会・人権論の課題
 (立命館大学人文科学研究叢書 第五輯) 中谷義和・安本典夫編 △5判・三三三頁・四八〇〇円
 伝統的パラダイムに収まりきれない状況を民主政・主権・人
 権・ガヴァナンスの論点で整理し、法学・政治学の課題を提示。

●激しいスピードで変化したイラン農村社会を調査
中東の農業社会と国家——イラン近現代史の中の村
 (神奈川大学経済貿易研究所研究叢書⑩) 後藤 晃著 △5判・二五二頁・四〇〇〇円
 「伝統的農業技術」「耕地割替制」「地主制」等の調査から中東近
 現代史のダイナミズムをオアシス農村の場から描いた論究。

●「海運同盟の弱体化」の歴史を分析
海運同盟とアジア海運
 (大阪商業大学比較地域研究所研究叢書 第四巻) 武城正長著 △5判・三〇六頁・四八〇〇円
 コンテナリゼーション以降の欧州同盟とアジア海運の真相を
 分析し先進国と発展途上国との角逐と共存の歴史として把握。

●弁証法、唯物論、意識、個人の小主題より主題へ接近する
マルクスにおけるヘーゲル問題
 石井伸男著 △5判・二八〇頁・四二〇〇円
 「弁証法」、「唯物論」、「意識」、「個人」の四つの小主題から主
 題「マルクスにおけるヘーゲル問題」に接近する。

●功利主義倫理学とは何か
ベンサム倫理学・教育学論集
 西尾孝司著 △5判・二八〇頁・五八〇〇円
 「二部作」『道德および立法の諸原理序説』、『行為動機一覽表』、
 『義務論』を分析・考究し功利の原理に正面から取組む。

御茶の水書房 〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20 ▶価格は税別◀
 電話03(5684)0751/http://homepage1.nifty.com/ochanomizu-shobo/